



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	18世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 127, 29(左)-58(左)
Issue Date	2009-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35668
Type	departmental bulletin paper
File Information	SAT0_18138.pdf



18 世紀前半のいくつかのアイヌ語資料について¹

佐 藤 知 己

1. はじめに

本稿で扱うアイヌ語古文献は主に 18 世紀前半に属するものである。この時期の文献を特にここで取り上げる理由は次のようなものである。

筆者はこれまでも古文献のアイヌ語についての研究をいくつか発表して来た。しかし、対象とした文献は主に 17 世紀前半に属するものか、18 世紀末から 19 世紀にかけてのものであった。これは必ずしも偶然ではなく、その背景にはアイヌ語古文献に関わる資料上の制約がある。すなわち、17 世紀前半に属する文献は量的に極めて稀少で質的にも必ずしも精度が保証できない面があるとはいえ、今のところアイヌ語文献の最古期に属するもので、その資料的重要性は大きく、アイヌ語の過去の姿を知る上で優先的に研究する必要性が高いものである。他方、18 世紀以降の文献は、質、量両面で卓越しており、相対的に研究が容易で、その意味で資料的価値が高い、という利点がある。これに対して、18 世紀前半の資料は、量的に少ないという点は 17 世紀前半の資料に通ずるものがあるにもかかわらず、17 世紀前半の資料に比して、資料そのものは写本の形で一般に広く流布したものが少なくなく、必ずしも

¹ 本稿は科学研究費(基盤研究(C))、「古文献によるアイヌ語史の構築」、研究代表者北海道大学大学院文学研究科佐藤知己、課題番号 17520245) による研究成果の一部である。なお、本稿の作成にあたり、資料の閲覧に際してお世話になった所蔵機関(北海道大学附属図書館北方資料室、北海道立図書館、北海道立文書館、東北大学附属図書館)の各位に感謝申し上げる。

稀少とは言えない面がある。すなわち、18 世紀前半の文献は、筆者にとっては、最古期に属するというわけでもなく、資料的な稀少度が高いというわけでもない反面、資料精度はそれほど高いとは言えず、従って研究もそれほど容易でない、という、研究の優先順位においてはなかなか手を出しにくい性質を持っていたわけである。しかしながら、前後の時代の文献について一応の見通しを得た現段階において、両時代をいわば繋ぐ位置にある 18 世紀前半の資料を見ることは、まがりなりにもこの四百年間のアイヌ語の変遷の一貫した流れを把握する上でどうしても避けて通ることができないものであると考え、予備的なものではあるが、いくつかの文献を選び、その言語的特徴について以下で述べることにする。

2. 本稿で扱う文献について

以下で扱う文献のうち、「蝦夷談筆記」、「北海随筆」の二種は、1. でも触れたように、内容そのものは以前からよく知られていたものであり²、流布本も多く、稀少な資料というわけでは必ずしもない。しかし、高倉編（1969：401）が「松前蝦夷地の状況を詳しくする古典として、松宮観山の『蝦夷談筆記』、新井白石の『蝦夷志』と共に挙げられるのは、坂倉源次郎の『北海随筆』である」と述べているように、代表的な文献であるだけに、この時期のアイヌ語古文獻としては、まず第一に取りあげるべきものに入ると考え、ここで扱うものである³。言うまでもなく、この時期のアイヌ語文獻がこれらにつきるというわけでもなく、また、本稿の取り扱いが、これらの文獻に関する徹底的な研究である、というわけでも勿論ない。あくまでも今後の研究のための足がかりを得るためのものであるということを了とされたい。なお、これらの他、本稿ではさらに「蝦夷壽那子」、「狄島夜話記」という二つの文獻を

² いずれも高倉編（1969）に翻刻されている。

³ もっとも、『蝦夷志』については、他の二書と異なり、独立した語彙集が含まれていないので、今回は対象としなかった。

取り上げた。「蝦夷壽那子」は、以下で述べるように、厳密には「蝦夷談筆記」の「異本」とすべきものと思われるが、序文によれば「蝦夷談筆記」とは異なる年代のものなので、ここでは「蝦夷談筆記」とは一応独立に扱った。また、あまり一般には知られていないと思われる資料として、「狄島夜話記」のアイヌ語資料を加えた。この資料は極めて断片的で、かつ伝聞記録であり、精度に問題はあるが、この時期に属するアイヌ語文献として、年号が明記されたものとしては貴重であり、「蝦夷壽那子」、「北海随筆」よりもごくわずかではあるが年代が先である、という点も考慮して、ここで紹介、検討を行うものである。

「蝦夷談筆記」：宝永七〔1710〕年（高倉編 1969：388）。北海道大学附属図書館北方資料室蔵の「旧記 127」という所蔵番号を有する写本を用いた。書写年代は不明である。北方資料室にはこの他にもいくつかの「蝦夷談筆記」の写本が所蔵されているが、ここでこの写本を選択した理由は、複写でなく原本であることと、なによりもまず筆者にとってはもっとも読みやすいものであったからに過ぎない。なお、今回は、たまたま目睹し得た「蝦夷談筆記」の異本とみられる「蝦夷記 松前家實記上下 全」（北海道立文書館所蔵）との校合（主にアイヌ語の部分のみ）を行ったが、今後、他の写本による組織的な校合がさらに必要であることは言うまでもない⁴。なお、「蝦夷談筆記」と「蝦夷記」の語彙の内容、配列はほぼ同一であるが、「蝦夷談筆記」の語彙がアイヌ語・日本語の順に書かれているのに対し、「蝦夷記」の語彙は、日本語・アイヌ語の順に書かれていることを付記する。

「蝦夷壽那子」：元文元〔1736〕年。天保十四〔1843〕年写。東北大学付属図書館狩野文庫所蔵本を用いた。この写本は乾坤二冊に別れ、各五巻、計十巻からなる。巻頭に以下のような序文がある。

⁴ 原則としてアイヌ語の関係部分のみを示したが、日本語部分との著しい差異がある場合は「 」で示した。また該当する項目が欠けている場合は（この項目無し）とした。

つらつらいえるに元和年中天下一統に治り四海風静にて吹風枝をならさ
す六拾余州の四夷八蛮までも我日の神武の徳になつき君子国の威風齊に此
書ハ松前殿の通事中西勘右衛門直ノの御写を以て少しも無相違書集め蝦夷
壽那子と題し畢ぬ 元文元年 松前寓居 五月日 菅俊仍縷述

また、二冊目の末尾に「蝦夷壽那子大終 天保十四歳癸卯七月写之」とある。内容の大部分は上記の松宮觀山の書と言われ、「蝦夷談筆記」の名で知られているものとはほぼ同一のようである。ただし、既に述べたように、「蝦夷談筆記」の成立年とされる宝永七〔1710〕年とは序文の年代が異なる点が注目される。書写の年代は新しいが、狩野文庫の蔵本ではあり、「蝦夷談筆記」と同じく、アイヌ語の表記が平仮名でなされている点に一時代前の表記法を思わせるものがある（佐藤 1998：43）のでここでとりあげた⁵。

「北海随筆」：元文四〔1739〕年（高倉編 1969：401）。北海道立図書館本「北海随筆 白石撰 全」（210.088 Ho, H3635）（安永七〔1778〕年写）を底本とし、同じく北海道立図書館所蔵本「北海随筆」（210.088 Ho, H11552）（天保十五〔1844〕年写）と校合した。本書の流布本は極めて多く、ここで行った校合は筆者がたまたま目にすることができた写本によるものにすぎず、今後、さらに研究を必要とすることは言うまでもない。

「狄島夜話記」：享保十九〔1734〕年、松島瑞巖寺住職天嶺性空筆。東北大
学付属図書館所蔵。漢文、巻物一卷。遺憾ながら筆者には全文を検討する能

⁵ もっとも、今回扱った「蝦夷壽那子」の写本中の語彙は「蝦夷談筆記」に含まれる語彙のうちの一部しか含んでおらず、しかも日本語の訳語に対応するアイヌ語を見ると、「白を くん祢」以下は、一行飛ばして書写したために訳語が一行ずつずれているとみられる。すなわちこの写本はテキストに問題があるため、もし可能であるならば他の写本による検討を行う必要がある。例えば筆者未見であるが早稲田大学図書館に同名の写本が所蔵されていることがわかっている（早稲田大学「総合古典籍データベース」による）。今後の調査を期したい。

力がない。以下では本文に含まれている漢字で表記されたアイヌ語の単語のみを分析対象とする。

3. 諸文献の翻刻と対応する現代のアイヌ語形式

以下にそれぞれの文献の翻刻を示し、それぞれの後にそれらに含まれているアイヌ語に対応すると思われる現代のアイヌ語形式を示す。

「蝦夷談筆記」の語彙の翻刻：

蝦夷言葉

1. 一里起多⁶ 天, 2. 一 志り可多 地, 3. 一とうぶ徒つふ⁷ 日, 4. 一久祢徒つふ⁸ 月, 5. 一のちう 星, 6. 一者い可る⁹ 春, 7. 志や川て 夏, 8. 一徒つて 秋, 9. 一ま多 冬, 10. 一とう多ん祢 正月, 11. 一者婦⁹ ら婦¹⁰ 二月, 12. 一きう多 三月, 13. 一もき多¹¹ 四月, 14. 一志きう多 五月, 15. 一まうち徒つふ¹² 六月, 16. 一にい本らけ 七月, 17. 一やるひ 八月, 18. 一うれ本き多¹³ 九月, 19. 一志ゆ年ひん徒つふ¹⁴ 十月, 20. くゑ可へ¹⁵ 十一月, 21. 一徒ふる婦¹⁶ 十二月, 22. 一きむ多 山, 23. 一あ川い¹⁷ 海, 24. 一なゐ¹⁸ 沢, 25. 一遍⁹ 川¹⁹ 川, 26. 一も

⁶ [道立文書] 王き多⁹

⁷ [道立文書] とうぶ徒つふ

⁸ [道立文書] くん祢つふ

⁹ [道立文書] 者⁹ い可る

¹⁰ [道立文書] 者ふらふ

¹¹ [道立文書] もきう多

¹² [道立文書] あちふてふ

¹³ [道立文書] うれ本⁹ き多

¹⁴ [道立文書] 志や祢あん徒ふ

¹⁵ [道立文書] くろ可へ

¹⁶ [道立文書] 徒ふるふ

¹⁷ [道立文書] あつむ

志も²⁰ 嶋, 27. 一志ゝ里 磯, 28. 一連ら²¹ 風, 29. 一あふと²² 雨, 30. 一う者ゝ し 雪, 31. 一志ゆむ²³ 西, 32. 一めなし 東, 33. 一満くなを²⁴ 地[ママ], 34. 一び可多²⁵ 南, 35. 一連多る 白, 36. 一くん祢 黒, 37. 一婦う連 赤, 38. 一志う 青, 39. 一ちく尔 木, 40. 一むん 草, 41. 一ゑふ いけ花[ママ]²⁶, 42. 一い遍ゝ 木ノ實, 43. 一とう可婦 昼, 44. 一あじ可る 夜, 45. 一志りくん祢 くらき事, 46. 一ゆきゐ 嶺ノ高事, 47. 一うむ²⁷ ひきゝ事[ママ], 48. 一せ川ふ²⁸ 廣き事, 49. 一ふ川つね²⁹ せつキ事 [ママ], 50. 一たんね³⁰ 長, 51. 一たき祢³¹ 短, 52. 一者ゝ せ³² 重, 53. 一こし祢³³ 輕, 54. 一徒いなし³⁴ 早, 55. 一もい連³⁵ 遅, 56. 一とう遍に³⁶ 甘, 57. 一志う 苦, 58. 一うゑん 悪, 59. 一ある可³⁷ 辛, 60. 一志つ本満んぬ³⁸ 塩可らい事, 61. 一びる可³⁹ 能, 62. 一いこ尔 煩,

¹⁸ [道立文書] ない

¹⁹ [道立文書] (この項目なし。)

²⁰ [道立文書] もちり

²¹ [道立文書] 連う

²² [道立文書] (この項目なし。)

²³ [道立文書] しやむ

²⁴ [道立文書] まなを

²⁵ [道立文書] ひ可多

²⁶ [道立文書] ゑふいけ

²⁷ [道立文書] 「一ひききハ いちらん」

²⁸ [道立文書] せつふ

²⁹ [道立文書] ふつつね

³⁰ [道立文書] 多ん祢

³¹ [道立文書] たき年

³² [道立文書] 者ゝ セ

³³ [道立文書] こう祢

³⁴ [道立文書] ついなし

³⁵ [道立文書] もいれ

³⁶ [道立文書] とうべき

³⁷ [道立文書] 阿る可

³⁸ [道立文書] 志つ本さんぬ

63. 一らむらつ希⁴⁰ 息災, 64. 一つミ 軍, 65. 一くふ 弓, 66. 一くふ可
弓弦, 67. 一あい⁴¹ 矢, 68. 一者らおつふ⁴² 鎗, 69. 一ちミふ⁴³ 着物,
70. 一く川つ⁴⁴ 帯, 71. 一ゑもし⁴⁵ 脇差刀, 72. 一ゑひ里け⁴⁶ 小刀, 73.
一こ多ん 國, 74. 一可むゐ 神, 75. 一志やら可むゐ⁴⁷ 佛, 76. 一可むい
との⁴⁸ 殿様, 77. 一連ん可こる尔し者 家老, 78. 一尔し者⁴⁹ 侍, 79. 一
屋、志やらを⁵⁰ 平人, 80. 一うしおい⁵¹ 下人, 81. 一ゑ志ゆ里⁵² 坊主,
82. 一のふるくる 祢宜, 83. 一おつ可い 男, 84. 一めのこ⁵³ 女, 85. 一
者ん遍⁵⁴ 父, 86. 一者本^{*} 母, 87. 一満ち⁵⁵ 妻, 88. 一本く 夫, 89. 一
本ほ⁵⁶ 子共, 90. 一ふつち 者^{*}、, 91. 一阿ちや 伯父, 92. 一うなるへ⁵⁷
伯母, 93. 一ゆび 兄, 94. 一あ幾⁵⁸ 弟, 95. 一志や 姉, 96. 一徒れし⁵⁹
妹, 97. 一ちう婦 鳥, 98. 一せつふ 魚, 99. 一王つ可 水, 100. 一セ、

³⁹ [道立文書] びる可

⁴⁰ [道立文書] らむらつげ

⁴¹ [道立文書] 阿い

⁴² [道立文書] 者^{*} らおつふ

⁴³ [道立文書] 「一懸者 ちふみ」

⁴⁴ [道立文書] くつ津

⁴⁵ [道立文書] ゑぐし

⁴⁶ [道立文書] ゑひ尔け

⁴⁷ [道立文書] 志ゆら可むい

⁴⁸ [道立文書] かむいとの

⁴⁹ [道立文書] にし者^{*}

⁵⁰ [道立文書] ゆうしやも

⁵¹ [道立文書] こしおい

⁵² [道立文書] ゑ志ゆり

⁵³ [道立文書] めのこし

⁵⁴ [道立文書] 者んべ

⁵⁵ [道立文書] まち

⁵⁶ [道立文書] 本^{*} ほ

⁵⁷ [道立文書] こなるへ

⁵⁸ [道立文書] 「一弟 ち可ふ」

⁵⁹ [道立文書] つ連し

つ可 湯, 101. 一あ遍⁶⁰ 火, 102. 一志ゆ 鍋, 103. 一いた起⁶¹ 椀, 104. 一つき 盃, 105. 一遍介れ酒⁶² すミ酒, 106. 一せきけ 濁酒, 107. 一あまも⁶³ 米, 108. 一志ゆけあまも 食, 109. 一ひりけ婦⁶⁴ 白米, 110. 一お者 汁, 111. 一るう⁶⁵ 道, 112. 一 志年つふ⁶⁶, 113. 二 徒ふ⁶⁷, 114. 三 連つふ⁶⁸, 115. 四 い称つふ⁶⁹, 116. 五 あしきねふ⁷⁰, 117. 六 ゆ王ん遍^{*}, 118. 七 ある王んへ⁷¹, 119. 八 つべさんべ⁷², 120. 九 志ねべさんべ⁷³, 121. 十 王ん遍^{*} ⁷⁴

「蝦夷談筆記」に対応するアイヌ語の形式⁷⁵：

1. 里起多 rik ta「上に」, 2. 志り可多 sir ka ta「地面の上に」, 3. と

⁶⁰ [道立文書] あべ

⁶¹ [道立文書] い多き

⁶² [道立文書] べ介れ酒

⁶³ [道立文書] 阿まも

⁶⁴ [道立文書] びるけふ

⁶⁵ [道立文書] 留う

⁶⁶ [道立文書] 志称つふ

⁶⁷ [道立文書] つふ

⁶⁸ [道立文書] 連つふ

⁶⁹ [道立文書] い称つふ

⁷⁰ [道立文書] あきう称ふ

⁷¹ [道立文書] 阿る可んへ（ただし複写が不鮮明のため要確認。）

⁷² [道立文書] 徒へまんべ

⁷³ [道立文書] 志称王んへ（ただし複写が不鮮明のため要確認）

⁷⁴ [道立文書] 者んべ

⁷⁵ 以下、特に断らない場合、アイヌ語の形式は白沢ナベ氏による千歳方言からのものである。白沢氏のご教示に深く感謝申し上げる。また、白沢氏以外にも、織田ステノ氏（静内方言）、岡本ユミ氏（様似方言）からのご教示による形式を引用した箇所がある。これらの方々にもこの場を借りて深く感謝の意を表す。なお、諸資料からの語形の引用にあたっては補助記号等は便宜上省略したことがある。また、本稿で扱った文献間で収録語彙が重複している場合でも、冗長ではあるが参照の便宜を重視して重複を厭わず同じ形式をそれぞれの箇所であげてある。

うぶ徒つぶ *tókap cup kamuy* 「太陽」, 4. 久祢徒つぶ *kunne cup (kamuy)* 「月」, 5. のちう *nociw* 「星」, 6. 者い可る *paykar* 「春, 春になる」, 7. 志や川て *sak* 「夏, 夏になる」, 8. 徒つて *cuk* 「秋, 秋になる」, 9. ま多 *mata* 「冬, 冬になる」, 10. とうどん祢 *toetanne* 「一月」 (久保寺 1992 : 273), 11. 者婦° ら婦 *haprap* 「八月」 (田村 1996 : 171), 12. きう多 *kiwtacup* 「3 月」 (田村 1996 : 313), 13. もき多 *Mokiuta-chup* ‘The month of April’ (Batchelor 1938: 300), 14. 志きう多 *Shikiuta-chup* ‘The month of April[sic]’ (Batchelor 1938: 451), 15. まうち徒つぶ *maw* 「ハマナスの実」 (中川 1995 : 368), *uk* 「取る」, *cup* 「月」, 16. にい本らけ *níhorak* 「9 月」 (田村 1996 : 415), 17. やるひ *Yarui-chup* ‘The month of August’ (Batchelor 1938: 576), 18. うれ本き多 *urepok* 「10 月」 (田村 1996 : 782), 19. 志ゆ年ひん徒つぶ *Shunan-chup* ‘The space of time comprising the latter part of November and the first part of December during which time the Ainu catch salmon by first attracting them with lights or torches called *shune*’ (Batchelor 1938: 480), 20. くゑ可へ *kuwekay* 「2 月」 (田村 1996 : 371), 21. 徒ふる婦° *curup* 「12 月」 (田村 1996 : 69), 22. きむ多 *kim ta* 「山に」, 23. あ川い *atuy* 「海」, 24. なみ *nay* 「沢」, 25. 遍° 川 *pet* 「川」, 26. も志も *mosir* 「島」, 27. 志ゝ里 *sirar* 「岩」, 28. 連ら *réra* 「風」, 29. あふと *apto* 「雨」, 30. う者° し *upas* 「雪」, 31. 志ゆむ *sum* 「西」 (田村 1996 : 683), 32. めなし *menas* 「東風(?)」, 33. 満くなを *matnaw* 「北風(?)」, 34. ぴ可多 *pikata* 「南風(?)」, 35. 連多る *retar* 「白い」, 36. くん祢 *kunne* 「黒い」, 37. 婦う連 *húre* 「赤い」, 38. 志う *siwnin* 「青い」, 39. ちく尔 *cikuni* 「木」, 40. むん *mun* 「草」, 41. ゑふいけ *epuyke* 「花」, 42. い遍° *ipe* 「(木の実, 作物などの) 食用部分」, 43. とう可婦 *tókap* 「昼間」, 44. あじ可る *ancikar* 「夜」, 45. 志りくん祢 *sirkunne* 「暗くなる」, 46. ゆきゐ (不詳), 47. うむ *ram* 「低い」, 48. せ川ふ *sep* 「広い」, 49. ふ川つね「狭い」, 50. たんね *tanne* 「長い」, 51. たき祢 *takne* 「短い」, 52. 者° せ *páse* 「重い」, 53. こし祢 *kosne* 「軽い」, 54. 徒いなし *túnas* 「早い」, 55. もい連 *moyre* 「遅い」,

56. とう遍に tópen「甘い」, 57. 志う siw「苦い」, 58. うゑん wen「悪い」, 59. ある可 arka「痛い」, 60. 志つ本満んぬ sippo「塩」, runnu「塩辛い」, 61. ぴる可 pirka「良い」, 62. いこ尔 ikoni「お産する」(田村 1996: 226), 63. らむらつ希 ramu ratke「落ち着いた」(服部 1994: 296), 64. つミ tumi「戦争」, 65. くふ ku「弓」, 66. くふ可 kúka「仕掛弓の弦」, 67. あい ay「矢」, 68. 者らおつふ para「幅が広い」, op「槍」, 69. ちミふ cimip「きもの」(八雲方言等)(服部 1964: 86), 70. く川つ kut「帯」, 71. ゑもし emus「刀」, 72. ゑひ里け epirikep「ほうちょう」(旭川方言)(服部 1964: 121), 73. こどん kotan「村」, 74. 可むゐ kamuy「神」, 75. 志やら可むゐ Sarak-kamui 'The god or demon of accidents' (Batchelor 1938: 438), 76. 可むいとのかん kamuytono「殿様」, 77. 連ん可こる尔し者 irenka「法律」, kor「持つ」, nispa「旦那」, 78. 尔し者 nispa「旦那」, 79. 屋、志やらを yayan「普通の」, samo「日本人」(「シャモ」と発音される。日本語化したアイヌ語?, やや軽んじた表現。正式には sísam と言う), 80. うしおい ussiw「召使い」, 81. ゑ志ゆ里 hesurí「坊さん」(八雲方言)(服部 1964: 172), 82. のふるくる nupur kur「巫者」, 83. おつ可い okkay「男」(静内方言), 84. めのこ menoko「女」, 85. 者ん遍 hanpe「父」(旭川方言等)(服部 1964: 39), 86. 者本 hápo「母」(沙流方言等)(服部 1964: 39)⁷⁶, 87. 満ち maci「～の妻」, 88. 本く hoku「夫」, 89. 本ほ poho「～の息子」, 90. ふつち hútcí「祖母」(八雲方言)(服部 1964: 38), 91. 阿ちや aca「おじ」(八雲方言等)(服部 1964: 43), 92. うなるへ unarpe「おば」, 93. ゆび yupi「～の兄」, 94. あ幾 aki「～の弟」, 95. 志や sa「姉」(沙流方言等)(服部 1964: 43), 96. 徒れし turesi「～の(兄からみた)妹」, 97. ちう婦 cikap「鳥」, 98. せつふ cep「魚」, 99. 王つ可 wakka「水」, 100. セ、つ可 sesekka「湯」(美幌方言等)(服部 1964: 95), 101. あ遍 ape「火」, 102. 志ゆ su「鍋」, 103. いた起 itanki「椀」, 104. つき túki「盃」, 105. 遍介れ peker「明るくなる、済む」, sake「酒」,

⁷⁶ ちなみに、千歳方言では hápo は「父」を意味し、「母」は totto である。

106. せきけ (不詳), 107. あまも amam「米」, 108. 志ゆけあまも suke「炊事する」, amam「米」, 109. ひりけ婦 pirkep「穀物の精白したもの」(田村 1996:531), 110. お者 ohaw「汁, スープ」, 111. るう ru「道」, 112. 志年つぶ sinep「一つ」, 113. 徒ふ tup「二つ」, 114. 連つぶ rep「三つ」, 115. い祢つぶ inep「四つ」, 116. あしきねぶ asiknep「五つ」, 117. ゆ王ん遍^o iwanpe「六つ」, 118. ある王んへ arwanpe「六つ」, 119. つべさんべ tupesanpe「八つ」, 120. 志ねべさんべ sinepesanpe「九つ」, 121. 王ん遍^o wanpe「十」

「蝦夷壽那子」の語彙の翻刻：

蝦夷言葉の事

附り武具拵への事

- | | |
|---------|---------|
| 1. 天を | 里たき |
| 2. 地を | 志り可多 |
| 3. 日を | とふ可多徒くふ |
| 4. 月を | くん祢徒くふ |
| 5. 星を | のちう |
| 6. 春を | はい可留 |
| 7. 正月を | とう多ん祢 |
| 8. 二月を | 者ふら婦 |
| 9. 三月を | きくた |
| 10. 夏を | 志や徒て |
| 11. 四月を | もきらた |
| 12. 五月を | 志きした |
| 13. 六月を | 満うち津川婦 |
| 14. 秋を | 徒うて |
| 15. 七月を | 尔ゐほらけ |
| 16. 八月を | やるひ |
| 17. 九月を | うれ本ま多 |

- | | |
|----------|-------------------|
| 18. 冬を | また |
| 19. 十月を | 志ゆ祢あん徒くふ |
| 20. 十一月を | くゑ可て |
| 21. 十二月を | 徒婦る楚ふ |
| 22. 山を | きむ多 |
| 23. 海を | あ川い |
| 24. 澤を | ない |
| 25. 川を | 遍 ^ゑ 川 |
| 26. 嶋を | も志里 |
| 27. 磯を | 志ら里 |
| 28. 風を | 連ら |
| 29. 雨を | あふと |
| 30. 雪を | う者 ^ゑ し |
| 31. 西を | 志油む |
| 32. 東を | め那し |
| 33. 北を | まくな越 |
| 34. 南を | ひ可多 |
| 35. 白を | くん祢 |
| 36. 黒を | 婦う連 |
| 37. 赤を | 志ら |
| 38. 青を | ちく尔 |
| 39. 木を | むん |
| 40. 草を | ゑふいけ |
| 41. 花を | いべ |
| 42. 木の実を | とふ可ふ |
| 43. 昼を | あし可留 |
| 44. 夜を | 志りくん祢 |
| 45. 闇きを | ゆきい |

右蝦夷言葉の大略也

「蝦夷壽那子」に対応するアイヌ語の形式：

1. 里たき rik ta「上に」, 2. 志り可多 sir ka ta「地面の上に」, 3. とふ可多徒くふ tókap cup kamuy「太陽」, 4. くん祢徒くふ kunne cup (kamuy)「月」, 5. のちう nociw「星」, 6. はい可留 paykar「春, 春になる」, 7. とう多ん祢 toetanne「一月」(久保寺 1992: 273), 8. 者ふら婦 haprap「八月」(田村 1996: 171), 9. きくた kiwtacup「3 月」(田村 1996: 313), 10. 志や徒て sak「夏, 夏になる」, 11. もきらた Mokiuta-chup「The month of April」(Batchelor 1938: 300), 12. 志きした Shikiuta-chup「The month of April[sic]」(Batchelor 1938: 451), 13. 満うち津川婦 maw「ハマナスの実」(中川 1995: 368), uk「取る」, cup「月」, 14. 徒うて cuk「秋, 秋になる」, 15. 尔ゐほらけ níhorak「9 月」(田村 1996: 415), 16. やるひ Yarui-chup「The month of August」(Batchelor 1938: 576), 17. うれ本ま多 urepok「10 月」(田村 1996: 782), 18. また mata「冬, 冬になる」, 19. 志ゆ祢あん徒くふ Shunan-chup「The space of time comprising the latter part of November and the first part of December during which time the Ainu catch salmon by first attracting them with lights or torches called *shune*」(Batchelor 1938: 480), 20. くゑ可て kuwekay「2 月」(田村 1996: 371), 21. 徒婦る楚ふ curup「12 月」(田村 1996: 69), 22. きむ多 kim ta「山に」, 23. あ川い atuy「海」, 24. ない nay「沢」, 25. 遍` 川 pet「川」, 26. も志里 mosir「島」, 27. 志ら里 sirar「岩」, 28. 連ら réra「風」, 29. あふと apto「雨」, 30. う者` し upas「雪」, 31. 志油む sum「西」(田村 1996: 683), 32. め那し menas「東風(?)」, 33. まくな越 matnaw「北風(?)」, 34. ひ可多 pikata「南風(?)」, 35. くん祢 kunne「黒い」, 36. 婦う連 húre「赤い」, 37. 志ら siwnin「青い」, 38. ちく尔 cikuni「木」, 39. むん mun「草」, 40. ゑふいけ epuyke「花」, 41. いべ ipe「(木の実, 作物などの)食用部分」, 42. とふ可ふ tókap「昼間」, 43. あし可留 ancikar「夜」, 44. 志りくん祢 sirkunne「暗くなる」, 45. ゆきい (不詳)

「北海随筆」の語彙の翻刻：

夷言

1. リキタ トイ トウ ツツウ⁷⁷ クナウ⁷⁸ レイラ アブ ヘンヲウル⁷⁹
天 地 日 月 星 風 雨 長雨ヲ
2. ウラリ モヤ ベニベケン⁸⁰ ヲハセ アカ アベ コンル
雲 霧 曇 雪 水 火 氷
3. ベケン⁸¹ クン子⁸² タウカツフ⁸³ ヲヌマ アツイ
朝 夜 闇事を 昼 タ 海⁸⁴
通し用ゆ
4. シブン⁸⁵ ベツ ヘトタ シリ シヽリ⁸⁶ コヒ⁸⁷
沖 川 川上 嶋 磯 渡
マホタ
川下
5. キミタ ルウ ナイ トウ シヤウ シユマ⁸⁸
山 陸 谷 小川を 沼 瀧 石
通し用ゆ

⁷⁷ 天保写の道立図書館本では「ツツケ」。以下「道立天保」と略称する。なお、アイヌ語以外の細部については校合対象としなかった。

⁷⁸ 「道立天保」ノチウ

⁷⁹ 「道立天保」ベニヲウル

⁸⁰ 「道立天保」ベニヘケレ

⁸¹ 「道立天保」ベケレ

⁸² 「道立天保」タン子

⁸³ 「道立天保」タウカツフ

⁸⁴ 「道立天保」満シヨンクマイハ 干シヨンクイシカ

⁸⁵ 「道立天保」レブン

⁸⁶ 「道立天保」アイヌ語なし。

⁸⁷ 「道立天保」アイヌ語なし。

⁸⁸ 「道立天保」アイヌ語なし。

6. シリイツハ ランク ルヘ
岩 砂 道
7. ハンヘ⁸⁹ ハホ⁹⁰ ユヒ⁹¹ アキ ボヽ⁹² シヤ ツンシ⁹³
父 母 兄 弟 子 姉 妹
8. ヲツカイ メノコシ マチ ハシタメノコシ アイノ 幼者⁹⁴
男 女 婦夫 長者 夷を呼フ事
ニ通し用ゆ
9. ヘカチ ニシハ ウタレ シヤモ
小児 主人 旦那ト言コト也 下人 日本人
上タル者へ通し用ユ
10. シイヤモ⁹⁵ シヨモシヤモ カモイトノ
善人 悪人 御領主 尊敬する事を
カモイと言ふ故に神仏をもカモイ
ト云ふ
11. シヤハ⁹⁶ キサラ テキ チマ⁹⁷ セツル ラウタ
頭 耳 手 足 背 腹 馬 和語ト
同シ
12. ホクユク ニキ マタユク セタ シユマリ モユク ウソ⁹⁸
熊 熊膽 鹿 犬 狐 狸 獺

⁸⁹ [道立天保] ハンペ

⁹⁰ [道立天保] ハボ

⁹¹ [道立天保] ユビ

⁹² [道立天保] ボヽ

⁹³ [道立天保] ツレシ

⁹⁴ [道立天保] ヲツカイ

⁹⁵ [道立天保] シキシヤモ

⁹⁶ [道立天保] シヤバ

⁹⁷ [道立天保] ケマ

⁹⁸ [道立天保] ウリ

13. エリモ ウ子ウ コヘ⁹⁹ イタミベ¹⁰⁰
 鼠 膾腩臍 アシカ ト、 猫 和語ト 鴉
 同
14. サイチ イセホ チカフ¹⁰¹ カツナリ¹⁰² ヲタニコル¹⁰³ タバキ
 鼬 兎 鳥 鷺 鷺羽¹⁰⁴ 梟 鶺鴒
15. サル、 クイ ハンクロ¹⁰⁵ コヒシヨ タイコ ウリキ
 鵲 塩漬を 鴈 鳥 鴝 鴨類 蚤 虱
 キリホト云
16. ギ、リ¹⁰⁶ モフセ¹⁰⁷ キ、リ シヒ¹⁰⁸ ヒヨロクケ アイヒ¹⁰⁹ セツフ
 蚊 蠅 虫 鮭 鯡 鮑 魚
17. イチャニ¹¹⁰ リカ ホロ¹¹¹ シヤマンヘ イレタチ キクニ ムニ
 鱒 鯨 數子 鰈 鱈 木 草 生たる
 事を
18. シリイセ トツフ¹¹² イベ サツフ¹¹³ シゲ¹¹⁴
 子ハ¹¹⁵ 竹 木ノ實 檜 栗

⁹⁹ [道立天保] タヘ

¹⁰⁰ [道立天保] イタシベ

¹⁰¹ [道立天保] チカフ

¹⁰² [道立天保] カマチリ

¹⁰³ [道立天保] オタンコル

¹⁰⁴ [道立天保] ヒシ、

¹⁰⁵ [道立天保] ハングロ

¹⁰⁶ [道立天保] キ、リ

¹⁰⁷ [道立天保] モウセ

¹⁰⁸ [道立天保] シビ

¹⁰⁹ [道立天保] アイビ

¹¹⁰ [道立天保] イヂヤニ

¹¹¹ [道立天保] ホコ

¹¹² [道立天保] トツフ

¹¹³ [道立天保] サツフ

¹¹⁴ [道立天保] シゲ

19. フシマ タラヘニ¹¹⁶ シュング ソンバ¹¹⁷
朴 楓 松 桂
20. ケ子 エフイケ¹¹⁸ カルミ¹¹⁹
ハンノ木 花 菌類 ○エブリコ 蝦夷松前より
出る菌也
21. イケマ 蔓艸ノ
根ナリ
右二色は夷人の薬にて何病にても服用する
に即効あり切疵打撲にも用ゆる
22. アマモ カニタヂ¹²⁰ シュケアマモ ムンジム ヒハ
米 粃 食 煮る事を 粟 稗 酒
シュケと云ふ
23. 和語に アブラカラ ヤ、サケ シラリ シウム クンハコ¹²¹
同し 上酒 濁酒 粕 油 煙草
24. シツフ¹²² シヤランベ チニキレ¹²³ アツシ タツ¹²⁴ シヤモタカラ¹²⁵
塩 日本小袖 木綿 夷服 帯 金銀
25. シタルベ フウレ¹²⁶ クン子 シュノン
白 赤 黒 夜も闇も通用 黄

¹¹⁵ [道立天保] シリイロ子ハ

¹¹⁶ [道立天保] タウベニ

¹¹⁷ [道立天保] ソンバ

¹¹⁸ [道立天保] エマイケ

¹¹⁹ [道立天保] ラルシ

¹²⁰ [道立天保] アシタテ

¹²¹ [道立天保] タンバコ

¹²² [道立天保] シツフ

¹²³ [道立天保] テンキレ

¹²⁴ [道立天保] ノツ、

¹²⁵ [道立天保] ジヤモタカラ

¹²⁶ [道立天保] フウシ

26. チセ セウ ヤアツイ¹²⁷ イクシベ チツフ¹²⁸ クウ アイ
 家 蕤 苦 材木 船 弓 矢
27. イモシ¹²⁹ マキリ ケン セレンホ¹³⁰ アベベシ ハシ¹³¹ ウイナ
 太刀 出刃 針 キセル 火箸 炭 灰
28. ニイ マイタキ¹³² シウ キツキラ¹³³ シントリ¹³⁴ カツクシ¹³⁵
 薪 釜 鍋 囲炉裡 尊 柄杓
29. ムツカリ¹³⁶ ナタ イタキ シントク¹³⁷ シマイタキ ヤハ
 斧 鎌 椀 桶 茶碗 網
30. タシ¹³⁸ シヤム ヒカタ マツナウ¹³⁹
 東 西 南 北
31. シ子ツブ ツツフ レツブ¹⁴⁰ イ子ツブ¹⁴¹ アシキ イアシベ¹⁴²
 一 二 三 四 五 六
 アルウンベ¹⁴³ ツベツンベ¹⁴⁴ シ子ベサンベ
 七 八 九

¹²⁷ [道立天保] ヤアツカイ

¹²⁸ [道立天保] チツフ

¹²⁹ [道立天保] イモジ

¹³⁰ [道立天保] セレンボ

¹³¹ [道立天保] バシ

¹³² [道立天保] セイタギ

¹³³ [道立天保] キソキラ

¹³⁴ [道立天保] シントク

¹³⁵ [道立天保] カツクン

¹³⁶ [道立天保] ムツヤリ

¹³⁷ [道立天保] シントゝ

¹³⁸ [道立天保] ダン

¹³⁹ [道立天保] マツナフ

¹⁴⁰ [道立天保] レツフ

¹⁴¹ [道立天保] イ子ツフ

¹⁴² [道立天保] イアシキ

¹⁴³ [道立天保] アルワンベ

¹⁴⁴ [道立天保] ツベワンベ

32. ワニナキ¹⁴⁵ アシキ子¹⁴⁶ シ子アンハウ¹⁴⁷
十 百 千
33. パイカル シヤツテ ツツテ マタ ホロ ボン ヒルヤ¹⁴⁸ トリカ¹⁴⁹
春 夏 秋 冬 大 小 損 徳
34. アシリ ツシコ子 タン子 タキ子 、コロ ホブニ¹⁵⁰ ハイアン
新 古 長 短 寝 起 行
ホシヒ¹⁵¹
帰
35. ヤイラケリ エテカタイラ¹⁵² ビルカ¹⁵³ ウヘシ ハセ¹⁵⁴ コシ子
悦 悲 好 悪 重 軽
セツフ フツツ子¹⁵⁵
廣 狭
36. ユキイ ラム ツイヤシ¹⁵⁶ モイレ トウヘニ アルカ シウ
高 低 早 遅 甘 辛 苦
シツホナンヌ¹⁵⁷
鹹

¹⁴⁵ [道立天保] ワンナキ

¹⁴⁶ [道立天保] アシキ子ツブ

¹⁴⁷ [道立天保] シ子アンボウ

¹⁴⁸ [道立天保] ビルヤ

¹⁴⁹ [道立天保] トクカ

¹⁵⁰ [道立天保] ホブマ

¹⁵¹ [道立天保] ホシビ

¹⁵² [道立天保] エ子カタイラ

¹⁵³ [道立天保] ビルカ

¹⁵⁴ [道立天保] バセ

¹⁵⁵ [道立天保] フツ、子

¹⁵⁶ [道立天保] ツイナシ

¹⁵⁷ [道立天保] シツボナンヌ

37. ヨクソンヤ¹⁵⁸ ヨクルンハ¹⁵⁹ ハウコル¹⁶⁰ ハツチリ シルク
 賣 買 生 死 薬 和語ト 毒
 同シ
38. イベ イク¹⁶¹ メンナイフ¹⁶² ホブケ¹⁶³ ヲロイワ¹⁶⁴ イシヤマ
 喰 呑 寒 暑 有 無
 ラン子リ
 合点
39. ホチヤンハ¹⁶⁵ ウンホカシユ¹⁶⁶ テヒシヤ¹⁶⁷
 不合点 澤山 無数
40. ハイトコクウ¹⁶⁸ ランコシ子 サツキ子¹⁶⁹ ヲヤハ¹⁷⁰ タント
 道理 無理 去年 来年 今日
41. ニヤシヤツタ¹⁷¹ ラノマニ¹⁷² ホシケ
 明日 昨日 一昨日

「北海随筆」に対応するアイヌ語の形式：

1. リキタ rik ta「上に」, トイ toy「土」, トウ to「日」ツツウ cup「太

¹⁵⁸ [道立天保] ヨクワンヤ

¹⁵⁹ [道立天保] ヨクルシハ

¹⁶⁰ [道立天保] バウコル

¹⁶¹ [道立天保] イリ

¹⁶² [道立天保] メンナイカリハ

¹⁶³ [道立天保] ホブナ

¹⁶⁴ [道立天保] ラカイハ

¹⁶⁵ [道立天保] ホチキン

¹⁶⁶ [道立天保] ランポカシユ

¹⁶⁷ [道立天保] テビシキ

¹⁶⁸ [道立天保] バイトコクウ

¹⁶⁹ [道立天保] サウキ子

¹⁷⁰ [道立天保] ヲヤバ

¹⁷¹ [道立天保] ニラシヤツタ

¹⁷² [道立天保] ラノマン

- 陽, 月], クナウ *nociw* 「星」, レイラ *réra* 「風」, アブ *apto* 「雨」,
ヘンヲウル (不詳)
2. ウラ *úrar* 「雲」, モヤ (日本語?), ベニベケン *wen* 「悪い」, *peker*
「明るい」?, ヲハセ *upas* 「雪」, アカ *wakka* 「水」, アベ *ape* 「火」,
コンル *konru* 「氷」
3. ベケン *peker* 「明るい」, クン子 *kunne* 「暗い」, タウカツフ 「昼間」,
ヲヌマ *onuman* 「晩」, アツイ *atuy* 「海」
4. シブン *repun* 「沖に出る」, ベツ *pet* 「川」, ヘトタ *penata* 「川上に」,
マホタ *panata* 「川下に」, *sir* 「地面」, シヽリ *sirar* 「岩」, コヒ *koy*
「波」
5. キミタ *kim ta* 「山に」, ルウ (不詳), ナイ *nay* 「沢」, トウ *to* 「湖
沼」, シヤウ *so* 「滝」, シユマ *suma* 「石」
6. シリイツハ (不詳), ヲンク *ota* 「砂」, ルヘ *ruwe* 「～の足跡」
7. ハンヘ *hanpe* 「父(旭川, 名寄)」(服部 1964: 39), ハホ *hápo* 「母(八
雲等)」(服部 1964: 39), ユヒ *yupi* 「～の兄」, アキ *aki* 「～の弟」,
ボヽ *popo* 「(男の) 赤ん坊」(様似方言, 岡本ユミ氏による), シヤ *sa*
「姉」, ツンシ *turesi* 「～の妹(兄からみた)」
8. ヲツカイ *okkay* 「男」(静内方言, 織田ステノ氏による), メノコシ
menoko 「女」, *menokoshi* 「婦女<津軽方言」(久保寺 1992: 156), マチ
maci 「～の妻」, ハシタメノコシ *pashta* 「凡庸の」(久保寺 1992: 202),
アイノ *aynu* 「人間」
9. ヘカチ *hekaci* 「少年」, ニシハ *nispa* 「旦那」, ウタレ *utar* 「仲間」,
シヤモ *sísam* 「日本人」
10. シイヤモ *sísam* 「日本人」, シヨモシヤモ *somo* 「ない」, カモイトノ
kamuy tonó 「殿様」
11. シヤハ *sapa* 「～の頭」, キサラ *kisara* 「～の耳」, テキ *teke* 「～の
手」, チマ *kema* 「～の足」, セツル *seturu* 「～の背中」, ラウタ (不詳)
12. ホクユク *hokuyuk* 「雄クマ」(知里 1962 [1976]: 動物篇 153), ニキ
kamuy ninke 「クマの胆嚢」(静内方言), マタユク *mata* 「冬」, yuk 「シ

- カ, セタ seta「犬」, シュマリ sumari「きつね」(服部 1964:186),
モユク moyuk「タヌキ」, ウソ(日本語?)
13. エリモ ermu「ネズミ」, ウ子ウ unew「おっとせい」(八雲方言)(服部 1964:186)), コヘ(不詳), イタミベ etaspe「とど」(幌別方言等)(服部 1964:186)
14. サイチ sacir「イタチ」(知里 1962[1976]:146), イセホ isepo「ウサギ」, チカフ cikap「鳥」, カツナリ kapatcir「ワシ(?)」, ヲタニコル kotan kor kamuy「フクロウ」, タバキ(不詳)
15. サルハ sarorun「ヒバリ(?)」, キリホ kirpu「脂身」, クイ kuytop「がん」(服部 1964:190),
ハंकロー paskur「カラス」, コヒシヨ kopeca「かも」(沙流方言等)(服部 1964:189), タイコ tayki「ノミ」, ウリキ urki「シラミ」
16. ギヽリ kikir「虫」, モフセ mos「ハエ」, キヽリ kikir「虫」, シヒ sipe「サケ」, ヒヨロクケ heroki「ニシン」, アイヒ aype「アワビ」(知里 1962[1976]:動物篇 126), セツフ cep「魚」
17. イチャニ icaniw「マス」, リカ rika「(クジラの) あぶらみ」(田村 1996:579), ホロ homa「ニシンの卵」(田村 1996:195), シヤマンヘ samanpe「かれい」(八雲方言等)(服部 1964:191), イレタチ erekus(沙流方言等)(服部 1964:191), キクニ cikuni「木」, ムニ mun「草」
18. シリイセ(不詳), トツフ top「竹」, イベ ipe「(木の実, 作物などの) 食用部分」, サツフ(不詳), シケ(不詳)
19. フシマ pusni「ハウノキ」(田村 1996:550), タラヘニ topenni「イタヤ」, シュング sunku「アオキ(トドマツ?)」, ソンバ ranko「カツラ」
20. ケ子 kene「ハンノキ」, エフイケ epuyke「~の花」, カルミ kars「キノコ」, エブリコ epuruku「エブリコ」(白浦方言)(知里 1953[1976]:249)
21. イケマ ikema「イケマ」
22. アマモ amam「米, 穀物」, カニタヂ kamtaci「糰」, シユケアマモ

- suke「炊事する」, amam「米, 穀物」, ムンジム munciro「粟」, ヒハ piyapa「稗」
23. アブラカラ(不詳), ヤ、サケ yayan「普通の」, sake「酒」, シラリ sirari「酒粕」(中川 1995: 221), シユム sum「油」, クンハコ tanpaku「煙草」
24. シツフ sippo「塩」, シヤランベ saranpe「上等の布」, チニキレ(不詳), アツシ attus「樹皮衣」, タツ kut「帯」, シヤモタカラ(不詳)
25. シタルベ retar「白い」, pe「もの」, フウレ húre「赤い」, クン子 kunne「黒い」, シユノン siwnin「青い, 黄色い」
26. チセ cise「家」, セウ so「床」, ヤアツイ yattuy「ござ」, イクシベ ikuspe「柱」, チツフ cip「舟」, クウ ku「弓」, アイ ay「矢」
27. イモシ emus「刀」, マキリ makiri「小刀」, ケン kem「針」, レセンホ serembo 'A tobacco pipe' (Batchelor 1938: 443), アベベシ apepasuy「火箸」, ハシ pas「消し炭」(中川 1995: 320), ウイナ uyna「灰」(八雲方言, 幌別方言)(服部 1964: 107)
28. ニイ ni「木」, マイタキ(不詳), シウ su「鍋」, キツキラ(不詳), シントリ sintoko「行器(ほかい)」, カツクシ kakkum「ひしゃく」(美幌方言, 宗谷方言)(服部 1964: 120)
29. ムツカリ mukar「斧」, ナタ(日本語?), イタキ itanki「椀」, シントク sintoko「行器(ほかい)」, シマイタキ suma itanki「茶碗」(八雲方言, 美幌方言)(服部 1964: 116), ヤハ ya「網」
30. タシ(不詳, 日本語「だし」?), シヤム sum「西」(田村 1996: 683), ヒカタ pikata「南風(?)」, マツナウ matnaw「北風(?)」
31. シ子ツブ sinep「一」, ツツフ tup「二」, レツブ rep「三」, イ子ツブ ínep「四」, アシキ asik「語」, イアシベ iwanpe「六」, アルウンベ arwanpe「七」, ツベツンベ tupesanpe「八」, シ子ベサンベ sinepesanpe「九」
32. ワニナキ wának「十」(八雲方言)(服部 1964: 261), アシキ子ブ asiknep「五つ」, シ子アンホウ sine「一つの」, wan「十の」, hot「二

十」

33. バイカル paykar「春, 春になる」, シヤツテ sak「夏, 夏になる」, ツツテ cuk「秋, 秋になる」, マタ mata「冬, 冬になる」, ホロ poro「大きい」, ボン pon「小さい」, ヒルヤ (不詳), トリカ (不詳)
34. アシリ asir「新しい」, ツシコ子 husko「古い」, タン子 tanne「長い」, タキ子 takne「短い」, ヰコロ mokor「眠る」, ホブニ hopuni「起き上がる」, ハイアン paye-an「私達が行く」, paye yan「行きなさい」, ホシヒ hosipi「帰る」
35. ヤイラケリ yayraykere「ありがとう」, エテカタイラ ekatayrotke「仲良くつきあう」, ピルカ pirka「良い」, ウヘシ wen「悪い」, ハセ páse「重い」, コシ子 kosne「軽い」, セツフ sep「広い」, フツツ子 hutne「狭い」
36. ユキイ (不詳), ラム ram「低い」, ツイヤシ túnas「早い」, モイレ moyre「遅い」, トウヘニ tópen「甘い」, アルカ arka「痛い」, シウ siw「苦い」
37. ヨクソンヤ (不詳), ヨクルンハ (不詳), ハウコル hawkor「鳴く」, ハツチリ hatcir「ころぶ」(帯広方言, 旭川方言)(服部 1964: 23), シルク surku「毒」
38. イベ ipe「食事する」, イク「酒を飲む」, メンナイフ mérayke「寒がる」, ホブケ popke「暖かい」, ヲロイワ okay「ある(複数形)」(様似方言), wa「よ」, イシヤマ isam「ない」, ヲン子リ uwonnere「わかる」
39. ホチャンハ (不詳), ウンホカシユ (不詳), テヒシヤ (不詳)
40. ハイトコクウ(不詳), ヲンコシ子(不詳), サツキ子(不詳), ヲヤハ oya pa「来年」, タント tanto「今日」
41. ニヤシヤツタ nisatta「明日」, ヲノマニ núman「昨日」, ホシケ hoskinuman「一昨日」

「狄島夜話記」の語彙の翻刻：

1. 和人曰志也茂
2. 神天主君曰加茂伊
3. 僧人曰部素利
4. 男子曰阿以農
5. 女子曰免農古之
6. 米子曰志也末奴
7. 飯曰阿末茂
8. 酒曰部幾利
9. 烟筒曰勢礼保

「狄島夜話記」に対応するアイヌ語の形式：

1. 志也茂 samo 「(丁寧でないニュアンスで) 日本人」(samo という形式は「シャモ」のように発音されるのが普通で、厳密にはアイヌ語の形式というよりはむしろ、日本語化したアイヌ語というべきものかもしれない。あまり丁寧でないニュアンスをもって「日本人」を呼ぶ時に用いる呼称である。)
2. 加茂伊 kamuy 「神」
3. 部素利 hesurí 「坊さん」(八雲方言)(服部 1964 : 172)。
4. 阿以農 aynu 「人」
5. 免農古之 menokoshi 「婦女<津軽方言」(久保寺 1992 : 156)
6. 志也末奴 siyamam 「稲, 米」(田村 1996 : 668)
7. 阿末茂 amam 「米」
8. 部幾利 peker sake 「清酒」(八雲方言)(服部 1964 : 94)
9. 勢礼保 serembo 'A tobacco pipe' (Batchelor 1938: 443)

4. 言語的考察

4.1. 音声的特徴

音声的特徴に関しては、この時期の文献にも、アイヌ語の最古の記録に属する文献（「松前ノ言」）に現れる長母音（佐藤 1999）を表したとみられる表記（「連いら 可せの事」）が現れる点が注目される。もっとも、「風」が「蝦夷談筆記」で「連ら」、「蝦夷壽那子」でも「連ら」であるのに対し、「北海随筆」では「レイラ」と不一致を示していたり、「松前ノ言」では「つうきう さ可つき」となっているものが、「蝦夷談筆記」では「つき 杯」と表記されていることを考慮すれば、あるいはこの時期は長母音が失われつつある過渡的段階であったことを反映しているとも考えられる¹⁷³。また、「北海随筆」には他にも「ハセ páse 重い」のように長母音が予想される第一音節が短く表記されている例がある一方、「ツイヤシ túnas 早い」、「トウヘニ tópen 甘い」のように長母音を表したとみられる表記も現れる点も問題となろう。今後、さらに同期の他の文献資料を用いて検証すべき点であると言える¹⁷⁴。

長母音の問題に関するもう一つの興味深い事例は次のようなものである。「蝦夷談筆記」で「とう可婦」、「蝦夷壽那子」で「とふ可多徒くふ」、「北海随筆」で「タウカツ」¹⁷⁵と表記されている形式は、tókap「昼」もしくはこの形式を含む形式に対応するとみられるが、「とう」、「とふ」、「たう」のように長母音を表記したとみられる表記を有する。ところが、この語は、例外的に、後期のアイヌ語文献においてもやはり長母音的な表記がなされている例のあ

¹⁷³ 18 世紀末の『藻汐草』にも「レイラ」という表記がみられるのでこの点についてはさらに慎重に検討すべきこと言うまでもない。

¹⁷⁴ tunas「早い」、topen「甘い」は、例えば現代の千歳方言でも第一音節が長めに発音されることがあるが、これは概略的に言って、形容詞的な意味を含む語に強調のイントネーションが加わった場合であり、従ってこの長さは弁別の特徴ではないと考えられる。長母音を表したとみられる表記であってもこのような意味領域の語彙の場合にはそれが弁別の特徴を表記したものかどうか一考を要すると言える。

る点が注目される。たとえば、『藻汐草』(寛政四 [1792] 年) では「トーガ
プ 昼」、また、佐藤 (1995: 280) で扱った「蝦夷言いろは引」という文献
は天保五 (1848) 年と記された文献であるが、ここでも「午刻 トウカフ」
と書かれている。この問題も、今後さらに他の文献にあたって考える必要は
あるが、一つの仮説としては、次のようなことも考えられるのではないだろ
うか。すなわち、古い時代の長母音は次第に失われ、短母音となったが、一
音節の開音節からなる自立語（この場合は to「日」、通常は長目に発音され
る）と語源的関係があると意識された場合は、一音節語の発音で余剰的に生
ずる「長母音」的な発音に対する一種の「類推」で、第一音節が長く発音さ
れる形式が新たに生まれ、短母音化した形式をある場合には圧倒してしまっ
た可能性である。現在、例えば千歳方言において、tōkap の第一音節が著しく
長く発音されることはないといつてよいが、この時期の一部の方言でこのよ
うな余剰的な長母音の特徴を有する形式が存在したことは十分考えられる。
今後の検討課題としたい¹⁷⁵。

佐藤 (2008) は「松前ノ言」の「王んふ」(wanpe 十 に対応) などの表
記に関連して、形式名詞 pe「もの」の e は古くは [ə] のような曖昧母音だっ
たのではないかと推定した。「北海随筆」には 25. 「シタルベ」(retar-pe「白
い・もの」か)、26. イクシベ (i-kus-pe「そこを・通る: もの」か) のよう
に形式名詞 pe を含むとみられる例があらわれるが、いずれも「べ」であつ
て、「ふ」に類する表記は見あたらない。従って、仮説を補強する結果は出な
かったが、あるいはこの時期には既に完全に e に合流していたとも考えられ
る。

pirka「良い」は「蝦夷談筆記」では、「びる可」, 「北海随筆」でも「ビル
カ」と表記されているが、佐藤 (1999: 56-57) でも指摘されているように、

¹⁷⁵ なお、一音節語の影響以外の原因によるとみられるものもある。例えば、kéra「味」の
第一音節の e は短く発音されるが、場合によっては長く発音される場合もある。それは
うしろに an「ある」をとって、「おいしい」という形容詞的な意味の表現の一部となっ
た場合である。古文獻の「長母音」の中にも、このような強調的イントネーションを受
けやすい形式で長母音的表記がなされている場合がある可能性がある。

アイヌ語最古の文献の一つである「松前ノ言」のこの語の表記も「びる可」であって、後の時代で一般的な「ピリカ」のような表記を用いていない。このことがいかなる音声的状态を反映するものなのかはさらに研究を要するけれども、少なくともこの時期の文献がより古い時代の文献と一致する特徴を示す一例と言える。

4.2. 語彙の特徴

「星」を意味する語は、「蝦夷壽那子」では「のちう」、「北海随筆」では「クナウ」と表記され、いずれも現代の *nociw* という形式に対応するものと考えられるが、一時代前の文献である「松前ノ言」では、「星」は「里いこ」（おそらく *rikop* に相当か）であることを考えると、両時期においてなんらかの原因で語彙の交替が起こったか、それぞれの文献が依拠している方言が著しく異なる地方のものである可能性があると言える。

「北海随筆」、「狄島夜話記」には、後期の資料にはほとんど例がないと思われる「女 メノコシ」、「女子曰免農古之」という例が現れる。「松前ノ言」でも「めのこし」、デ・アンジェリスの記録でも「*menocoxi*」であることを考えると（佐藤 2008）、この時期のアイヌ語には、語彙の面ではまだ前時代と共通する部分が残っていたことを示すものといえる¹⁷⁶。

「北海随筆」の「十 ワニナキ」は、「松前ノ言」の「十ヲ 王んふ」と一致しない。しかし、この形式は「松前ノ言」と同時代のデ・アンジェリスの記録に現れる「*Vanaqe touo*」（チースリク 1962：（36））と一致するものである。このような不一致がいかなる要因によるものなのか、即断はできないが、あるいは「北海随筆」が依拠した方言と、デ・アンジェリスの資料が依拠している方言とが類似していたことを示すものかもしれない。なお、服部（1964：261）には、「*wānak* 十」（八雲方言）という形式が載る。

「北海随筆」の「アイノ 長者」は、*aynu* 「人間」に対応するとみられる語

¹⁷⁶ ただし、本稿で扱った「蝦夷談筆記」の写本では予想に反して「めのこ」である。これがいかなる理由によるものかは他の写本を含めたさらなる研究が必要である。

形に「長者」という、一種の尊称を当てている点が注目される。この語が古くは現在の「人間一般」という意味よりは、「立派な人間」という、より「格式ばった」意味を有していた可能性を示すものとも考えられる。なお、既に児玉作左衛門博士は、明治前日本科学史刊行會編（1971：209-210）の中で、aynu に相当する語はポルトガル人イグナシオ・モレイラが 1590 年に de Iezorum insula「蝦夷人の島」という文書の中で ainomoxori という語を記して以後、「北海随筆」は aynu に相当する語を記録した最も古い文献である、と述べておられる。この指摘は、「北海随筆」よりもわずかに古いと思われる「狄島夜話記」の存在によって幾分訂正される可能性はあるけれども、児玉博士が言うように、それほど出現例が多くないとすれば、それはこの語の意味が現在とは異なっていたためであるとも考えられる。

5. おわりに

18 世紀前半に属するアイヌ語古文献は、近世後期と近世初期とを結ぶ、アイヌ語史の研究においては重要な位置を占めるものであるが、これまでに知られている資料の絶対量が少なく、この時期におけるアイヌ語の状態については実態がよくわかっていない点が多い。本稿では、限られた資料ではあるが、この時期に属する文献をいくつか選び、近世初期、近世後期の文献が示す特徴と比較対照しながら、この時期のアイヌ語の言語的特徴の推定を行った。その結果、両時期をつなぐ特色と思われる点が少数ながら見いだされたとと言える。今後、さらに資料を加えて、この時期のアイヌ語の実態解明に努める必要があると考えている。

参考文献

- Batchelor, J. 1938. *An Ainu-English-Japanese Dictionary*. 4th ed. 岩波書店.
久保寺逸彦. 1992. 『アイヌ語・日本語辞典稿』. 北海道教育委員会.
佐々木利和・田中聖子. 1985. 「近世アイヌ語資料について ― とくに『もしほ草』をめぐ

- て——」,『松前藩と松前』24,松前町教育委員会,17-32.
- 佐藤知己,1995,『「蝦夷言いろは引」の研究』,北海道大学文学部言語学研究室.
- ,1998,「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について」(1),『北海道大学文学部紀要』46-3,北海道大学文学部,41-64.
- ,1999,「天理大学付属天理図書館所蔵「松前ノ言」について」(2),『北海道大学文学部紀要』47-4,北海道大学文学部,53-88.
- ,2003,「酒田市立光丘文庫所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について」,『北海道大学文学研究科紀要』111,北海道大学大学院文学研究科,95-118.
- ,2008,「アイヌ語古文獻における言語学的諸問題」,『北海道大学文学研究科紀要』124,北海道大学大学院文学研究科,153-180.
- 高倉新一郎(編),1969,『日本庶民生活資料集成』4,三一書房.
- 田村すず子,1996,『アイヌ語沙流方言辞典』,草風館.
- チースリク, H. 1962,『北方探検記』,吉川弘文館.
- 知里真志保,1953[1976],『分類アイヌ語辞典第一巻植物篇』(日本常民文化研究所彙報64),日本常民文化研究所, (『知里真志保著作集別巻Ⅰ』,平凡社,所収)
- ,1962[1976],『分類アイヌ語辞典第二巻動物篇』(日本常民文化研究所彙報第87),日本常民文化研究所, (『知里真志保著作集別巻Ⅰ』,平凡社,所収)
- 中川裕,1995,『アイヌ語千歳方言辞典』,草風館.
- 服部四郎(編),1964,『アイヌ語方言辞典』,岩波書店.
- 明治前日本科學史刊行會(編),1971,『明治前日本人類學・先史學史』,日本學術振興會.